



米国紀行...①



岡 雅司さん

岡 雅司(才谷・市4Hクラブ会長)

昭和五十七年六月、全国から集まったさまざまな人間の集団である日本農業研修生百三十人の一員として、胸いっぱい希望を抱き成田空港からアメリカへ向け出発した。

ワシントン州モーゼズレイクに私たちの大学があった。広大な土地、そして午後九時に日が沈み、木陰に入るととても涼しいのに驚いた。この大学に着くなり前の端に席を陣取り、アメリカ人を見つけては「ハロー、ハロー」の毎日で一カ月間の英会話学習を終え、三カ月間の短期実習に入った。

私の場合は、六人一組で、二〇〇畝という日本では考えられないほどのリンゴ園を所有している農場に配属された。この農場では数種類ものリンゴを栽培しており、その中でもグラニースミスというグリーンリンゴは生産量世界一を誇っていた。農場内は独自の選果、パッキング、貯蔵施設を備えており、全米のスーパーマーケットを中心に出荷するほどの企業経営農場であった。

そこでは私たちにトレイラーハウスと言われる移動自由自在の家が与えられ、二週間ごとにもらえる百十ドルのうち五十ドルを食費とする自炊生活が始まった。今まで料理など経験のない私にとってこれはきついものだった。

また、国土の広さに比例してアメリカ人の胃袋は大きく、ストア内には一割(三・三割)の牛乳パックが並び、肉類にしても一磅(四五〇g)単位で売られている。感心させられたことに果物、野菜類は傷のある物、形の不ぞろいな物などが山積みされ売られていた。日本のように一個一個磨かれた物ではないが、消費者はさほどの抵抗もなく買う。これは日本の消費者も見習わなければならない。そして、もう一つには減量用食品の多いのに驚かされた。

この農場でさまざまな仕事を経験したが、この中で最も印象に残っているのがリンゴ収穫シーズンだった。この収穫風景は言葉に表せないほどすさまじいもので、二百人から三百人ものピッカー(収穫する人、主にメキシコ人が二十段もの長いはしごを容易に操りながら手でもぎ取っていく。これはピースワーク(一箱につき八ドル十ドル)で、慣れたメキシコ人だと一日に七十八箱(一箱約五〇kg)採るからとてもじゃないが勝てない。私はメキシコ人たちの生活に対する、また金に対する執念のようなものを見た気がすると同時にアメリカ農業を支えている労働力は何かということを感じ知らされた。

この期間、私はトラクター(後にリフト付き)を使って収穫箱の出し入れをやった。一台のトラクターで二十〜二十五人のピッカーを担当し、朝から晩まで箱の出し入れで、忙しいときはトラクターで走りながらサンドイッチを口に運ぶというのが実情で、一日十〜十四時間乗り続けたシーズンだったが、まったく苦にはならずかえって自分自身非常に楽しく充実した日々だった。また、カナダ国境辺りにまでリンゴの支柱のためのもを切り出しに行ったことも、苦しくはあったが今は懐かしい思い出として頭の中に残っている。あつという間に三カ月間が過ぎ



グラニースミスというリンゴの生産量は世界一を誇る、短期学習で最初に配属されたゲバース農場(57年10月、日本の研修生とともに。写真左が岡さん)

すつかり生活、仕事に慣れたころ、短期実習を終え再び大学に戻り二カ月間の英会話学習及び農業の基礎知識を学び、いよいよ専攻別に配属されるころの長期実習を迎えた。そのとき二年半後の米国東部旅行で元気な姿で会おう。ともにがんばろう」と固い握手を交わしながら、研修生百三十人が全米各地に次々と散っていった。